

すどれちあ丸

《主要目》貨客船、東海汽船所屬、3,700総トン、918重量トン、主機ディーゼル2基、2軸、出力11,600馬力、最高速力21.8ノット、旅客定員1,320名（近海非国際）・2,250名（沿海6時間未満）、1978年三菱重工下関造船所建造

伊豆大島と三宅島の噴火で島外避難に大活躍



両陛下ご乗船当時の「すどれちあ丸」。八丈島底土港で筆者撮影

昭和天皇が皇后さまとご乗船

船旅がお好きだった昭和天皇が、皇后さまとご一緒に乗られた最後の船が、この「すどれちあ丸」である。

一九八二（昭和五十七）年の晩秋、八丈島と三宅島に旅行された両陛下は、十一月十六日、八丈島から三宅島まで三時間半の船旅を楽しまれた。そして東海汽船の東京～三宅島～八丈島航路の定期船「すどれちあ丸」が、お召船の榮譽に浴したのである。ご案内をしたのは、東海汽船の尾上社長と同社のスタッフで、鈴木都知事も同行した。

両陛下がお使いになったキャビンは、上部遊歩デッキのサロンに隣接する右舷特等客室（現在の特等A客室）である。昼をはさんの航海だったので、椿山荘のシェフが調理した昼食が、サロン内に用意された。献立は洋風で、皇后さまは少し酔いされてキャビンで横になられていたが、昭和天皇はおいしそうに召し上がったという。

このとき「すどれちあ丸」は、御蔵島のすぐ近くを航行した。島の栗本村長から、「御蔵島を通るときは、できるだけ島の近くをお願いしたい。全住民が港と学校の校庭に出てお迎えをする」

との要望があったからで、尾上社長は、

「陛下が島のほうをご覧になったら汽笛を鳴らす」と答えたとのことだ。

御蔵島が近づくと、鈴木知事と尾上社長はデッキに出た。陛下もお出ましになって、

「あつよく見える」「みな手を振ってくれているな」とおっしゃって、さかんに手をお振りになっていたという。

使い勝手のよい外洋離島航路定期船

「すれちあ丸」は、一九七八（昭和五十三）年四月に三菱重工下関造船所で誕生し、それまでの「ふりいじあ丸」に代わって八丈島航路に就航した。航海速力は約二十ノット。離島航路では屈指の高速定期船だ。

ちなみに、「すれちあ丸」は八丈町の町花である。東京港で行われた就航披露の際、出席者全員に「すれちあ丸」の生花が配られたことを筆者は覚えていいる。

船種は貨客船である。伝統的な生活航路船だが、夏期には多くの観光客も運ぶ。したがって、生活航路船と観光船としての両面の機能をもっている。

外形は堅実そのもの。中央に角張った煙突、前後にはデリックポスト兼用のがんじょうな門型マストを持っている。デリックブームは荷揺れが少ないトムソン式だ。

東海汽船では初の可変ピッチプロペラ（二

軸）とフィンスタビライザーも装備された。

「かとれあ丸」から導入のバウスラスターも強力なものが採用されたが、これは二枚舵とともに、猫のひたいのようにせまい八丈島底土港の回頭でたいへん効果的だった。

要するに、この船のハードをひとことといえば、使い勝手のよい外洋離島航路定期船ということになるが、最大の特長はなんといっても旅客定員が大きいこと。沿海区域の定員は二千人をこえる。そしてこの大キャパシティーが、三宅島と伊豆大島の噴火の際に、絶大な威力を発揮したのである。

災害時に役立った大キャパシティー

三宅島が噴火したのは、両陛下ご乗船の翌年の一九八三（昭和五十八）年十月だった。このときは溶岩流が島の西側の阿古地区を襲ったため、地区住民の半数が「すれちあ丸」で島を離れ、首都圏に疎開した。

八六（昭和六十一）年十一月の大島三原山の噴火は、これよりもさらに大きかった。溶岩流は外輪山をこえて大島の中心である元町に迫り、大島町長は全島の住民に島外への避難を指示した。避難者数は約一万五百人、所要時間は八時間だった。

このときの東海汽船フリートの活躍はめざましかった。総数の七割にあたる約七千四百

人を同社の船が運んでいる。なかでも特筆ものは、大収容力を誇る「すれちあ丸」。一挙に、約二千四百人を東京に移送したのである。一万人をこえる全住民が短時間で島外へ脱出したケースは、離島史上めずらしいが、このときの事例は、離島からの避難活動に定期船の大キャパシティーと高速力が有力であることを、実績で示したといえる。

七ヵ月後の八七（昭和六十二）年六月、昭和天皇が噴火見舞いに大島を訪問され、島の安全が印象づけられた。往きはヘリコプター、帰りは高速船「シーガル」に乗られた。そしてこれが、陛下の最後の船旅となった。

かつて「すれちあ丸」船上から陛下が手を振ってこたえられた御蔵島には、その後四千トン岸壁が完成し、九一（平成三）年十月から「すれちあ丸」が定期寄港している。同社の前身である東京湾汽船が明治の半ばに御蔵島航路を開設して以来、大型定期船の接岸寄港は住民の多年の悲願であった。

「すれちあ丸」は今も伊豆七島の海を走っている。だが船齢は十八年。妹格の準姉妹船「おがさわら丸」（七九年建造、船体の形状と寸法は舵を除きほぼ同一）は、来春、小笠原航路から撤退し新船と交代する。「すれちあ丸」の元氣な姿を見れるのも、今のうちかもしれない。

（山田 迪生）